そういえば、この前

甲崎雄人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そういえば、この前

【Ｎコード】
Ｎ９３１６Ｌ

【作者名】
甲崎雄人

【あらすじ】
ある夜のことだ
夜の散歩にでた俺は変なものを見たんだ

もう数週間前の夜のことだけどな
真夜中の１２時過ぎに急に俺はどこかに出かけたくなった
その時読んでいた本の影響だろうな
普段見ない、真夜中の街の顔が見たかったんだ
親はまだ起きていたが、問題はない
いつもなら寝ていてもおかしくない時間だったし、寝ているところに入ってくるような親じゃなかった
玄関から靴を取ってくるとそっと窓から抜け出した

俺は夜の空気を吸い込みながら人っ子一人歩いていない道を歩いた
少し冷たい夜の空気とほんのちょっとの罪悪感が俺のテンションを上げていく
これだから真夜中の散歩はやめられない
その時はそんなことも考えていた

夜の街は面白かった
やっぱり昼間とは違う顔を見せてくれた
いつもは人が絶えない道は沈黙に包まれ、ほんの一時間前まではネオンが映えていたデパートも闇に紛れた
十数人で黙々とスリラーを踊る女達や公園で二人きりでイチャイチャする男二人組なんかもいた
さすがに公園では恐くてすぐに引き返したけどね

まぁ、そんなこんなで夜の街を満喫した俺は帰路に着いた
ん？
それだけかって？
そう急くなよ

あくまで、夜の街は抜け出した理由の説明
見たのは帰り道だ

何も別の顔を見せるのは夜の街だけじゃない
いつも歩く道だって夜の顔を見せる
街灯の少ない暗い道は薄暗く不気味で、誰もいない夜の学校を通る
時なんて少しの物音にさえびくついてしまう
墓場なんて昼間でさえ近寄りがたいのに夜なんてもってのほかだ

その墓場のそばを通った時だった
最初は気のせいかとも思った
だけど、確かにガッガッ、と何かを打ち付けるような音が聞こえる
そのまま気にせずに帰ればよかった
でも、テンションが高かった俺にはその音に対する恐怖心より好奇心のほうが勝ってしまったんだ
そこの墓場のそばにはお寺があって、立派とは言えないがご神木がある
墓場に入っていく細道に入るとどうやらそのお寺のほうから音がなっているらしい
ほとんど明かりがなく初めは何も見えなかったけど、しばらくすると目がなれてきてご神木のそばに立って何かしていることがわかった
ガッガッ
長い髪のその女はご神木に向かって何かを打ち付けているようだ
気づかれないように俺は墓に身を隠しながら少しずつ近づいていく
近付きながら俺は女がやってることにだいたいの検討をつけていた
携帯の時刻を見るとやはり2時過ぎ
丑の刻参りだ
これで女が藁人形を打ち付けていたら紛れも無くそうだ
それを確かめるために俺はどんどん距離を詰めていくすると、あることに気づいた

打ち付ける音と一緒にビチャッビチャッという音が聞こえるんだ
ただの丑の刻参りじゃ聞こえるはずがないその音に気付いてしまった
普段なら絶対に引き返すであろうその違和感
だが、夜の空気に毒された俺は止まる事ができなかった

そして、俺は見た
髪を振り乱し、木に張り付た血まみれの子猫に向かって何度も何度
も釘を打ち付ける女の姿を

自分でも血の気が引いていくのがわかった
これはさすがにヤバイと思って、俺は気付かれないうちに引き返そ
うとしたんだ

カンッ
空き缶が俺の足に当たり、音をたてる
女に俺の存在を気づかせるには十分だった

「誰だっ！！」

俺はたまらず駆け出した
家はもうすぐそこだったが、あの女相手じゃ家に逃げ込んでもどう
しようもない気がしたんだ
逃げるしかなかった

女の足は思うのほか早く、なかなか距離を離すことができない
その事実が俺をさらに焦らせる
それでも、確実に距離は開いていき、俺の気持ちが少し緩んでいた
のかもしれない
俺は足がもつれてバランスを崩した
ちょうどその時、何かが頭の上を音をたてて通り過ぎたんだ

カラン、カラン
少し離れたところで何かが落ちる音を聞きつつ、俺はなんとか体勢をたてなおし、必死に走る
ふと目に入ったのはさっき頭の上を通り過ぎたであろう金づち
あの時、体勢を崩さなかったら……と、思うと今でもゾッとするよ
もう走れないと思ったとき、気づけば女の足音は聞こえなくなっていた
その晩はとても家の近くに近寄る気にはなれず、俺はばあちゃんの家に泊まったよ

あれは本当に恐かったな〜
でも、この話親には話してないんだ
抜け出したことバラさないといけないからさ
最初はびびってたけど、最近はそこまで気にならなくなってるしなてか、この部屋暑いな
そこの壁にリモコンかかってるからエアコンつけてくれ
サンキュ
それじゃ、今日は親もいないし、酒でも買ってきてパーッとやるか！

あ
そういえば、お前ら誰にうちに入れてもらったんだ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9316l/

そういえば、この前

2010年10月19日21時15分発行